

高村光太郎と石井鶴三——信州大学蔵新出高村光太郎書翰から——

出口智之（東海大学文学部）

一

彫刻家にして詩人でもあった高村光太郎が昭和三十一年に歿した時、石井鶴三は次のように述べてその死を悼んだ。

「惜しい人をなくした」とは人に死なれた時、よく発せられる言であるが、高村さんの場合は世間普通のものでなく、衷心より惜しいことをしたと悲しまれるのである。／それは高村さんにはまだく／なすべき仕事があつて、それがなし遂げられて居ないと思うからである。

鶴三はさらに、「残念とも何ともいふ言葉がない」と歎きつつ、光太郎が「彫刻家として現代一人者であつた」ことや、「現代日本の彫刻の指導者として不滅の功績を残された」ことを讃えている^①。もちろん、故人の人物や事蹟を褒めるのは追悼文のつねではあるが、そうした文章の性格や、あるいは高村光太郎という存在が事実有していた巨大さを差引いてもなお、切々と語られた鶴三の言葉には深甚たる哀惜が感じられるだろう。その背後にあつたのは、儀礼的な表現の枠組をはるかに超えた、二人の芸術家の親しい交流だった。

高村光太郎と石井鶴三との出会いについて、正確な時日や状況を

明らかにするのは難しい。だが明治三十七年、数え十八歳だった鶴三がはじめて木彫を学んだ加藤景雲は、光太郎の父、高村光雲の門を出ているし、また翌三十八年九月に彼が東京美術学校彫刻科選科へと入学した時、光太郎は同校の彫刻科研究科から西洋画科へと移っているから、少なくともこのころには何らかの接触があつたと見て不自然ではない。実際、鶴三は後年になって「この師匠（加藤景雲——注）から光太郎さんの少年時代のことを聞いていた」と述べているし、おなじ文章中には「日露戦争の頃」、「上野の陳列館」において催された「彫塑の展覧会」で光太郎の作をはじめて見たとの回想もある^②。これは明治三十八年五月、上野公園にて開催された第一回塑像同窓会展のことで、光太郎が出品した「薄命児」「解剖台の上の紅葉山人」の二作品について、鶴三は「今も眼前に浮んでくる位深く印象している」と記している。

この後、光太郎は明治三十九年二月から四十二年七月まで洋行し、帰朝後はその経験を生かして精力的な文筆活動を開始する。おなじころ、鶴三は東京美術学校に通うかたわら、北澤楽天が創刊した漫画雑誌『東京パック』の記者を勤め、生活費や学費を稼ぐ毎日であつた。多忙を極めたであろう生活のなかで、彼は光太郎の存在を強く意識し、その活動を心の支えにしていたようである。

私は（帰朝後に発表された——注）高村さんの文章を読み感動を受けては、高村さんは勉強している、彫刻をやつて居られる。と心を強くしたのである。そうして其文章によつて、高村さんは今どういう勉強をして居られるか、どんな境地に達していられるか、およそわかるようであつた。（中略）私は近くに住んでいたのも、高村さんのアトリエの前をしばしば通つた。だが邪魔になることを慮つて殆ど訪問はしなかつた。いつも感慨深くあのアトリエを見あげて通つた。あの中に高村さんが心こめて勉強して居られる姿が見えるようであつた。この感覚は何とも不思議なものであつた。^③

文中で「いつか兄に対する如き感じを持つようになり、この敬愛の心は今に変わらない」とも語られている光太郎への親しみは、かくして養われていったのであつた。

しかしながら、こうした鶴三の敬慕の情にもかかわらず、両者のつながりを示す資料はかならずしも多くはない。比較的よく知られたものとしては、彼が光太郎と並んで「日本の近代彫刻の道を開いた先覚者」と評価する^④、荻原碌山の顕彰活動がある。簡単に紹介しておけば、碌山は明治十二年生の彫刻家であり、洋行から帰朝した明治四十一年、文展に出品した「文覚」が鶴三に強い感銘を与えたものの、翌々明治四十三年に急逝した。留学中の米国で知りあつて友誼を結んだ光太郎は、その死の報に接し、鶴三に「荻原には将来に望みをかけていたので、いま突然の死に遇い、それが忽然として消え去り、云うところを知らない」と語つたとのことである。^⑤

昭和二十九年、この碌山を記念顕彰する企画が持上がり、当時東京芸術大学に勤めていた鶴三が中心になって、作品の写真版や

伝記などを収めた『彫刻家 荻原碌山』が刊行された^⑥。この企画に光太郎がどの程度関わっていたのかは正確にはわからないが、「荻原守衛」と題した回想の一文が鶴三自身の「彫刻の先覚荻原碌山」と併録されたこともあつて、両者の接点を示す数少ない資料の一つとなつている。元来、鶴三が昭和十九年に東京芸術大学からの招きに応じたのも、それが光太郎と揃つての就任という提案であつたかららしく、彼は後年「実は其時彫刻科の教授として選ばれたのは、高村光太郎と私の二人だつたのである。高村さんと二人出るならば彫刻科の改革も思うように出来るであらう、と私はのり気になつた」と語つて、光太郎がこれを固辞したことを残念がつてい^⑦る。とはいえ、これらはいくまでも編纂された書物や回想の類にすぎず、両者の交流の様態を直接に伝えているわけではない。

しかしながら、このほど信州大学に寄贈された石井鶴三関連資料のなかに、光太郎からの書翰が数点確認された。それらはいずれも、両者の親しい関係を雄弁に物語っている。以下、本稿ではそれらの内容を紹介するとともに、書翰が書かれた背景を考察することによつて、彼らの交流の様相を明らかにしてゆきたい。

二

現在までに確認された寄贈資料中の高村光太郎書翰のうち、最も時期が早いのは「高1—187」の仮番号が附された昭和二年三月の葉書である。まずはその全文を示そう。

おてがみ拝見、先夜は

あなたがわざわざおいで下さつたので

つひ引受けてしまひましたが、いろいろの都合がありますため、出来るなら来学期の四月にといふ事にしていただきたいのですが。大変のばすやうですけれども、そのおつもりにねがひます。とりあえず御返事まで一寸。

三月五日夜

葉書の宛先は「市外雑司ヶ谷／上り屋敷一一四八／自由学園美術部二テ／石井鶴三様」と記され、差出人の欄には「駒込林町二十五／高村光太郎／三月五日夜」とある。消印は「駒込／2・3・6／前9・10」と読めるから、昭和二年三月五日の夜に書かれ、翌六日に投函されたことがわかる。もちろん、年の表記が「2」としかない以上、大正年間に書かれた可能性も考えねばならないが、鶴三が美術教師として自由学園に着任したのは大正十五年のことだから、こゝは昭和二年の手紙と見て間違いない。

この文面からは、鶴三が数日前に光太郎のもとを訪れ、何事かを依頼して内諾を得たことや、あらためて確認の手紙を送ったらしいことなどが知られる。ところが三月中の実行は困難ということで、四月までの延期を請うべく、光太郎はこの葉書を書いたのである。彼が受取った鶴三からの手紙は確認されておらず、依頼の内容を正確に知ることはできないが、幸いこの後信と見られる書翰が寄贈資料中に残されていた。「高1—163」の仮番号が附された一通である。

御てがみ拝読して実は大きに弱りました。

いつぞやわざわざあなたが来て下さつて御話をきいてゐるうちに自然とその気になつて御承諾いたし、承諾した以上はどうしてもやらうと存じ、あれから一度「大調和」主催の講演会といふものに試みに出てみましたが、十分間位話すのがやつとの事にて、それも意味が本当には伝はず、思ふ事と口から出る言葉とが甚だしく齟齬し、結局小生はとて講演は出来ない人間と思ひきめてしまひました。幸ひ今の処演説する必要の無い仕事を職業としてゐるわけで、此点大いに安心してゐる次第なのです。此事を早く申上ぐ可きでしたが、何となく弁明するのが面倒なやうな気がして一日のびにのびて居たため、今になつてはお断りするの甚だ御迷惑をかけるやうになり相ですが、どうぞ此事よく御含みの上自由学園の方へよろしく御伝へねがひ上げます。其上今月はいろいろの都合にて時間も多く無之、又最近前歯をかきたる為め平常の談話にも稍不自由を感じ居る等、等、悪料材「以上二字入替え」多々の次第に候。甚だ勝手の申分なれど右あしからず御賢察然る可く御取計ひ下さるやう幾重にもおねがひいたします。とりあえず御返事のみとりいそぎて

六月九日

高村光太郎

石井鶴三様

封筒の表書は「市外雑司谷／上り屋敷／自由学園にて／石井鶴三様」、差出人は「六月九日／駒込林町二十五／高村光太郎」、消印は「駒込／2・6・10／前7・8」と記されている。すなわち、先の葉書から三ヶ月後の書翰である。巻頭の文言から、鶴三の依頼がこの六月の時点でもはたされておらず、それについて重ねて打診してきた手紙への返信であるとわかる。そして続く本文によって、その依頼の内容が自由学園における講演であったと知られるのである。

ここで確認しておく、自由学園とは羽仁吉一ともとの夫妻によって、大正十年に設立された学校である。当時は東京市外の北豊島郡高田町に校舎を構え、キリスト教の精神にもとづいて女子教育を行っていた。共学化や移転などを経て、現在は東久留米市にて存続しているが、創立当初の校舎も自由学園明日館（みょうにち）として豊島区に現存する。なお、宛先表記にある上屋敷（あがりやしき）とは近隣の地名である。

前述したとおり、鶴三は大正十五年四月、吉田白嶺とともにこの自由学園の美術教師に就任し、昭和十二年まで勤めている。右に紹介した二通は、学園における何らかの企画のため、鶴三が光太郎に講演を依頼したことに対する返事なのであった。鶴三はおなじ昭和二年の六月二十三日、旅先から妻に宛てた葉書に「明夜自由学園の連中が音楽会をするさうだ 私にも講演をするやうに番組がつくつてあるさうだが迷惑な話だ」と記している⁹、彼自身も美術を教えるのみならず、講演を行うことがあったと知られる。この時の講演者として光太郎が選ばれた経緯は不明だが、彼とつながりのある鶴三が交渉にあたったものであろう。

ところが光太郎は、一度はこの依頼を引受けたにもかかわらず、

先の葉書で四月以降に延引したうえ、結局はこの手紙で辞退を申し込んでいる。その理由は、一度「大調和」主催の講演会」に出席してみたものの、うまくいかなかったためと書かれている。この「大調和」とは、武者小路実篤が主導した企画で、昭和二年四月に雑誌『大調和』を創刊、翌三年十月の終刊にいたるまで、旧『白樺』同人を中心に創作や論説を多数掲載した。また、昭和二年十一月と三年十月には二度にわたって大調和展という展覧会を開催、光太郎は武者小路、長与善郎、柳宗悦、佐藤春夫、志賀直哉らとともに監査委員をつとめたほか、自身もいくつかの作品を出品している。

右の書翰で言及されている「講演会」とは、昭和二年三月十七日、雑誌『大調和』の創刊を記念して読売新聞社講堂で開かれたものである。十九日の『読売新聞』には、「大調和」創刊記念講演会」と題して、会の模様が写真入りで伝えられている。

十七日夜本社講堂に開催直ちに満員の盛況で河野氏が先頭第一に出場、講演途中で一度汗をぬぐひに楽屋に入るなど、いふ場面があつてその熱誠の程も察せられる、次いで珍しくも高村光太郎氏が壇上に立つて又予定の五分間を越す十分といふ上出来。室伏氏に代つて千家元麿氏の詩の朗読があり、次は佐藤春夫氏の偽らざる最近の心境披露があり最後に武者小路氏の長広舌「人類と個人」とがあつて九時半閉会（写真は向つて右から佐藤、岸田、河野、武者小路の諸氏）

この記事の内容は、光太郎が書翰に「十分間位話すのがやつとの事にて」と書いているのに符合する。彼の登壇について「珍しくも」とされていることから、光太郎が講演を好まなかったのはある程度

知られた事実だったようだが、しかし「結局小生はとても講演は出来ない人間と思ひきめてしまひました」という手紙の文言が、はたして本当の実感であったのか、それとも単なる断りの文句であったのかを判断することは難しい。ともあれ、自由学園はこの辞退の申入れを承諾したらしく、それに対する礼状と見られる絵葉書、仮番号「高1—188」が寄贈資料中に確認できる。

一寸頭をなほす為
に三国峠へいつて

昨晚帰宅、御てがみ拝見、

貴下はじめ、学校

の皆さんの御諒解

を忝く存じま

した。そのうち

遊びに参上するかもしれません。

高村光太郎

六月十七日

宛先はおなじく「市外／雑司ヶ谷／上り屋敷／自由学園にて／石井鶴三様」で、消印は「駒込／2・6・18／前7・8」と押されている。絵葉書の裏は三国峠を写した写真で、「上州法師温泉場前 三国嶺の遠景」と印刷されている。法師温泉は、群馬県の月夜野と新潟県の湯沢とを隔てる三国峠を越える道、三国街道沿いに涌く温泉である。この時、光太郎に同行していたと思われる尾崎喜八は、後年になって次のように回想している。

水上が終点になっていた上越線を後閑で下りて、結束して歩き出した爽やかな朝の三国街道。高村さんと初めてする山の旅らしい旅が嬉しかった。(中略)途中をゆつくり楽しんで日の暮と一緒に着いた法師の湯。今でこそ温泉好きや山好きに広く知られている名ではあるが、高村さんが四十六、私が三十七だった二十数年前の法師温泉なるものは、上州も特に辺鄙な北西の山の奥、三国山脈直下の深い谷あいにはひっそりと細い湯けむりを上げている、名声からも時代からも遠く取り残された存在だった^⑩。

「私は高村さんと二度小さな旅をした」と述べる喜八は、ともに法師温泉を訪れたこの旅が昭和四年のことで、その翌年にはおなじ法師温泉を出発点として草津温泉まで歩いたとしている。しかし、これはおそらく「戦争で当時の日記やノートの類を焼いてしまった」、彼の記憶違いであろう。ここまでに紹介した三通の書信が出された昭和二年、喜八は『詩神』八月号に「『所有の歌』から(高村光太郎に)」と題した一篇を発表しており、そこには「私は君と旅をした。／六月、栃の花咲く^{そはみち}岨道をゆき、／山の峠で展望し、／新緑の谷間の温泉に身をしづめた。」とある。一方、昭和四年六月二十日の『都新聞』に掲載された「奥上州の旅から」(一)には、奥上州に滞在中だった光太郎からの「スグコラレルカ」という電報に接し、東京を出立したむねが記されている。よって、右の回想で語られている光太郎と連れ立って法師温泉を訪れた旅が昭和二年六月、また単独で上州へと向って旅先で光太郎と合流したのが昭和四年六月のことと推定できるのである。

六月十七日の日付を持つ仮番号「高1—188」の絵葉書は、光

太郎がこの喜八との旅において買い求めた一枚であろう。かくして彼の講演は実現することなく終り、以後この件についての往信はみられない。光太郎は晩年の昭和二十七年十一月、自由学園にて講演を行ったことがあるもの、鶴三が学園を辞してからすでに久しく、彼が何らかの形で関わったのかどうかは明らかでない。そして、寄贈資料中に含まれるこれ以外の光太郎書翰はいずれも、戦後になって彼が岩手県花巻郊外の山小屋に移住していた期間のものであった。

三

昭和二十年十月、光太郎は戦火を避けて疎開していた花巻を離れ、西へ十キロほど行った稗貫郡太田村字山口の小屋へと移り住んだ。爾後、彼は昭和二十七年十月に帰京するまで、七年にわたってこの山小屋に起居することになる。寄贈された資料のなかには、この期間に鶴三に宛てた書翰が六通確認されており、戦争を挟んでも変らぬ両者の交友を物語っている。そのなかで最も早いのは、昭和二十三年（推定）六月二日に送られた次の手紙である。

おてがみ昨日拝受、

笹村草家人氏からも来信ありましたが

その二通のうち前便一通未着のためよく分りませず、大兄のおてがみの趣にてほゞ分明いたしました、同氏からのおたよりは六月月中旬頃大兄と御一緒においでになりたきやう認めてありました、

大兄御旅行の途次お立寄りあるかも知

れぬ趣拝承、遠路恐縮至極に存じ

ます、其上花巻より山口にまゐる途中の

飯橋が多雨の時は屢々落ちて交通杜絶

になりますので一寸気がかりになります。

御手がみ拝承の御返事のみ とりあえず。

六月二日

高村光太郎

石井鶴三様

仮番号「高1-164」の書翰である。封筒表の宛先は「秋田県大曲町／榊田憲蔵様方／石井鶴三様」とあり、そのうえに「本人左記へ出立後二ツキ廻送願上候／秋田県十和田湖畔和井内ホテル／石井鶴三様／〈印記〉榊田」と記された紙が貼附されている。消印は「□□／□・6・2／岩手□」としか判読できないが、差出人が「岩手県稗貫郡／太田村字山口／高村光太郎／六月二日」となっているから、光太郎が山口の小屋に移住していた期間の手紙であることは間違いない。この間、鶴三が大曲や十和田湖を訪れた記録を探すと、彼は昭和二十三年の五月十二日に東京を出発し、しばらく秋田の湯沢や大曲に滞在したあと、青森、十和田湖、大湯温泉と旅しているから、この旅の途中で交された往信のうちの一通と考えられる。

旅中の鶴三の日記を見てみると、五月三十日の条に「高村光太郎氏へ手紙速達出し」とあり、六月一日には「榊田家を辞して」て、六日に「和井内に着く」と記されている¹²。右の書牘は、この鶴三からの来信に対する返事と見られ、彼の出立後にこれを受取った滞留先の榊田憲蔵が、おそらくは旅程を聞いていたのだろう、十和田湖畔の和井内ホテルへと転送したのである。本文中の笹村草家人とは鶴

三に師事した彫刻家で、五月二十二日付で和田光子に宛てた鶴三の葉書に「笹村氏の方へは高村さんのことなど云ってやりました」とあり、また六月十四日付の同人宛書翰にも「花巻に一九日に出て草家人等とおちあい高村さんを訪ねる筈です」との記述があることから、旅中に手紙で光太郎訪問の予定を立てたらしい。両者がそのむねを光太郎へと書送った手紙のうち、草家人からの第一便は届かなかったようだが、鶴三の書音によって意は伝わり、二人は六月二十日、「太田村山口に住む高村光太郎氏訪う」と訪問をはたしたのであった。

おなじ昭和二十三年の八月十二日、光太郎は鶴三に次のような葉書を送っている。

村長さんの小さな娘さんが小包が来たといつて背中へ背負つて

持つてきてくれました。まだ開封

しません、クルミと書いてあるので

きつと甲州の山のクルミと思ひま

した。たくさんいただいてまことにすみ

ません。山でもクルミは中々たくさん

入手出来ませんのに。

今年は貴下におめにかかれたのが

何よりよろこばしかつたです。夏は

苦手ですが作物のいいのが慰めです。

仮番号は「高1—185」、宛先は「東京都板橋区／板橋町三の二六二／石井鶴三様」、差出人は「岩手県稗貫郡／太田村山口／高

村光太郎／八月十日」とあり、消印は乱れているものの、「□□／23・8・12」と読める。さらに、この続信と思われるのが仮番号「高1—184」の葉書で、文面は以下のとおりである。

信州からのおたより忝く

いただきました。村長さんの

娘さんから小包をうけとつてお礼

を書いたハガキには甲州の山のクルミ

かと思つて申上げましたが、信州

特産のクルミでは更に上等の

わけであります。お心づくしが

身にしてみる思です。

暑さは今が峠でせう。畑の草

と虫とに負けさうです。大根が

少々遅れました。

宛先はおなじく「東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様」であり、差出人も同様に「岩手県稗貫郡／太田村山口／高村光太郎／八月十五日」とある。消印は「□□／23・8・□」となっている。

一読すれば知られるように、この二通は鶴三が光太郎に送った胡桃の礼状である。前者の葉書において、まだ小包を開封前の光太郎が「甲州の山のクルミ」かと考えたのは、鶴三が終戦のころから山梨県北都留郡桐原村尾続（おつづく）の山小屋に時おり出かけ、畑で農作物を育てていたことを聞きおよんでいたからだろう。実際にはそれは「信州特産のクルミ」だったわけだが、鶴三はこの直前、七月三十一日より八月十四日にかけて長野、上田、軽井沢などを旅しているから、

その旅中で胡桃を送ったと考えられる。「今年は貴下におめにかかれたのが何よりよろこばしかつたです」という言葉には、山中に独居するなかで友の訪れや便りを喜ぶ、光太郎の心情がうかがわれる。

これらに続く「高1—189」の葉書は、次のような内容である。

おたより忝く拝見、

先日笹村氏よりいろいろの食糧

をたくさんいただき、貴下の御芳

志の由申送られ、感謝してゐた

ところでした。今年の冬はどこも

あたたかだつたと見え、此辺でも

雪が少く、むしろ物足らぬ感じが

してゐました。今露の臺が出

はじめ、野ビルが芽を出してきま

した。一週間ほど前から電灯が

つくやうになりましたが、これも村の

人達の好意ある尽力によるものでした。

宛先はやはり「東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様」で、差出人は「岩手県花巻局区内／太田村山口／高村光太郎／二月廿六日」と記されている。消印は「□□／□・2・27」としか読めない

が、光太郎の山小屋に電灯がついたのは昭和二十四年二月二十二日のことであつたから、その直後に書かれたことは明らかである。これは鶴三が弟子の草家人に指示し、光太郎に食糧を送らせたのに対する礼状とおぼしいが、おなじ二十四年の十一月十二日にも、次のような葉書が送られている。

てがみ差出したあとへおハガキ到

着、ほんとにクルミはありがたく存じ

ました、信州のはたしかに良質の

やうで、飴煮にしたり、すり「一字不明 ミセケチ」つぶして

いろんなものをあへたり、生のまま嚙

つたり、とてもたのしみでもあり、からだ

にもいいでせう。冬になつたので小生

元気をとりもどしました。

藤村木像は期待されます、まだ

今日の日本の彫刻はゆたかに十分に

発育してゐないと思ひますので

今後こそたのしみです。

仮番号は「高1—186」、宛先は例によって「東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様」、差出人は「岩手県花巻局区内／太田村山口／高村光太郎／十一月十二日」、消印は「花巻／24・11・13／岩手□」と記されている。これも昨年同様、鶴三が信州産の胡桃を送ったのに対する礼状である。文中に見える「藤村木像」とは、鶴三がこの年の八月から手がけていた、島崎藤村の木像制作のことである。木曾教育会の支援によって、藤村七回忌の八月二十二日に入刀し、翌二十五年に完成した。

よく知られているように、高村光太郎はこのころ、戦時中に発表した作品の戦争責任を問われて激しい批判を受けていた。そうした情勢のなかにあつて、鶴三は旅の途中で光太郎のもとを訪れ、また決して豊かとはいえなかつただらう食糧をしばしば送っていたので

あった。そこにかがわれるのは、彼が戦後も光太郎に寄せていた、変らぬ好意にほかならない。そして、寄贈資料中に確認された光太郎からの最後の書翰は、「高1—183」の仮番号を持つ次の一通である。

先日はわざわざお立ち寄り下さつて
 ありがとうございます、当別温泉

からのおハガキはあれから二三日後に到着しました、

いただいたウグヒは甚だ結構にて珍重していただいてゐます、

今度の仕事の事では学校として心配して下さつて忝く存じます、うまくアトリエが借りられて万事好都合でした、

法隆寺金堂の雲肘木などお作りの由、
 貴下の外にこれを作り得る人はなからうと思ひ、まことによるこびました、

光太郎が山小屋を去る直前、昭和二十七年七月十九日の手紙である。宛先は「東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様」、差出人は「岩手県花巻局区内／太田村山口／高村光太郎／七月十九日」、消印は「花巻／27・7・21」である。

鶴三はこのころ、六月の終りから北海道の釧路、当別、根室などを旅し、その帰途に光太郎のもとへも立ち寄った。光太郎の日記、七月五日の条には「石井鶴三氏北海道のかへりみち立よられる、ア

トリエの事を話す、二時過辞去、十和田湖の事は既に菊地一雄氏よりききぬたる由」とある¹⁸⁾。書翰中で言及されている「当別温泉からのおハガキ」とは、昭和二十三年の時と同様に訪問予定を葉書で知らせたものの、鶴三自身の到着より後になったということであろうか。光太郎はこの手紙を書いた翌日、笹村草家人へも「此間石井さんがわざわざ立ち寄つて下さつて、久しぶりでおめにかかれて愉快でした」と書送っている¹⁹⁾。

また、本文中の「今度の仕事」とは、日記にも記されているように、この年の三月に依頼を受け、六月に十和田湖を訪れて制作を決定したばかりの「乙女の像」のことと考えられる。光太郎はこの後十月に七年間住んだ山小屋を出て帰京、中野桃園町四十八番地のアトリエに入って制作に着手しているが、来訪した鶴三に「アトリエのことを話す」と語り、さらに手紙でも「借りられて万事好都合でした」と記しているのは、このアトリエのことであろう。光太郎の日記から、少し前の七月三日の条を見ると「藤島宇内氏来訪、東京中野の中西利雄氏アトリエが借りられる由」とあり、彼は来訪した鶴三に、この趣を早速語り聞かせたのであった。かくして取りかかった像が完成するのは、翌二十八年六月のことである。

さらに、手紙の巻末に「法隆寺金堂の雲肘木などお作りの由」とあるのは、昭和二十四年一月に焼損した法隆寺金堂の再建のため、鶴三が引受けた雲斗および雲肘木の制作を指す。雲斗、雲肘木とはともに金堂の軒まわりに用いられている部材で、雲形の彫刻が施されているためこの名がある。また東京芸術大学で教鞭を執っていた鶴三は、東京と奈良とを頻繁に往復し、法隆寺東室に泊り込んで制作にあたったのだった。その多忙さのなかで、十一月七日にはふたたび笹村草家人とともに、帰京した光太郎のもとを訪れている²⁰⁾。

信州大学に寄贈された石井鶴三関係資料中、現時点で確認されている高村光太郎の書翰は以上である。これらはいずれも、永年にわたった両者の交友を物語る貴重な資料であり、回想や日記などの断片的な記述でしか知ることのできなかった彼らの往来の実態を、鮮やかに浮かびあがらせている。そして、仮番号「高1-186」の冒頭に「てがみ差出したあとへおハガキ到着」とある、その「てがみ」の存在がいまだ確認されていないように、光太郎はこれらのほかにも、かなりの数の書信を鶴三に送っていたと考えられる。もっとも、これらの書翰には芸術観を闘わせたり、作品を批評しあつたりした形跡こそないものの、本稿の冒頭に述べたような鶴三の光太郎評価にかんがみれば、彼はこの親しい先輩と膝を交えて話すことによつて、少なからぬ示唆や啓示を受取つていたと見てよいだろう。その意味で、ここに紹介した一連の書翰は、両者の関係をあらためて捉えなおす契機となりうるものなのである。

注

- (1) 石井鶴三「高村光太郎氏をおもう」(『婦人之友』昭和三十一年六月)百三十七〜百三十八頁。
- (2) 石井鶴三「彫刻家としての高村光太郎」(『芸術新潮』昭和二十八年三月)五十四頁。
- (3) 石井鶴三「彫刻家としての高村光太郎」(前掲)五十五頁。
- (4) 石井鶴三「彫刻の先覚高村光太郎」(『現代日本文学大系』月報十五、筑摩書房、昭和二十九年七月)一頁。
- (5) 石井鶴三「彫刻家としての高村光太郎」(前掲)五十五頁。
- (6) 東京芸術大学石井教授研究室編『彫刻家 荻原礫山』(信濃教育会、昭和二十九年十二月)。
- (7) 石井鶴三「彫刻家としての高村光太郎」(前掲)五十七頁。
- (8) 『石井鶴三日記』第一卷(形文社、平成十七年三月)四百十七頁。
- (9) 石井鶴三「石井美佐宛葉書」昭和二年六月二十三日(『石井鶴三書簡集』II、形文社、平成九年十二月)二百七十七頁。
- (10) 尾崎喜八「高村さんとの旅」(『尾崎喜八詩文集』9、創文社、昭和四十七年六月)二百五十三〜二百五十四頁。
- (11) 高村光太郎「日記」昭和二十七年十一月二十日(『高村光太郎全集』第十三卷、筑摩書房、平成七年十月増補版)百五十七頁。
- (12) 『石井鶴三日記』第三卷(形文社、平成十七年三月)百四十三〜百四十五頁。
- (13) 石井鶴三「和田光子宛葉書」昭和二十三年五月二十二日(『石井鶴三全集』第九卷、形象社、昭和六十二年十二月)百五十八頁。
- (14) 石井鶴三「和田光子宛書翰」昭和二十三年六月十四日(『石井鶴三全集』第九卷、前掲)百六十五頁。
- (15) 『石井鶴三日記』第三卷(前掲)、百四十八頁。なお、高村光太郎もこの時の訪問のことを、六月二十六日付の樺澤ふみ子宛書翰で「石井鶴三氏一行も旅行の途次立寄られました」と報じている(『高村光太郎全集』第二十一卷、筑摩書房、平成八年十一月、四百十九〜四百二十頁)。
- (16) 『石井鶴三日記』第三卷(前掲)百五十三〜百五十四頁。
- (17) 北川太一『人物書誌大系』8高村光太郎(日外アソシエーツ、昭和五十九年五月)二百七十九頁。
- (18) 高村光太郎「日記」昭和二十七年七月五日(『高村光太郎全集』第十三卷、前掲)百二十七頁。
- (19) 高村光太郎「笹村草家人宛葉書」昭和二十七年七月二十日(『高村光太郎全集』第二十一卷、前掲)五百九頁。
- (20) 高村光太郎「日記」昭和二十七年七月三日(『高村光太郎全集』第十三卷、前掲)百二十六頁。
- (21) 高村光太郎「日記」昭和二十七年十一月七日(『高村光太郎全集』第十三卷、前掲)百五十四頁、『石井鶴三日記』第三卷(前掲)三百四十頁。